2019年
盛夏号
第 199 号

飛鳥 かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人　永野　正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話　088-850-0588
e-mail:info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp

夏です！美しい尾びれを広げているのは土佐錦魚。ひとときの涼を感じます。

「土佐錦魚品評会」が８月 18 日（日）に
藤並公園にて AM11 時より開催されます。

待ちに待った梅雨明けと共に、あつ～い夏が
やってきました。
海に、川に、山に、お祭りと、楽しいことも
いっぱい！
さあ、お休みはどうやって過ごしましょうか。

出版物紹介「寝て待て」…… 2
お寿司の本顛末 ……松﨑淳子 3
新聞余話⑩ ……大澤重人 4
いろいろかいろ 三五 ……安藝眞一 5
キルギスタンからコンニチハ ㊻ ……氏原名美 6
おのころじま奮染記 17 ……田島征彦 7
出版物紹介「三世代を生きて」「春秋の記」…… 8
飛鳥だより …… 9
わが家の太郎 ㊻ ……永野雅子 10

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

出版物紹介

没後20年
片木太郎画文集
『寝て待て』
兄の歩いた足跡を追う

編集　岩崎　勇

B５変形
上巻 264 頁
下巻 232 頁
定価　4,000 円（税別）

「これは命懸けの終活になるぞ」
そう思って覚悟もした
没後十五年も過ぎてやっと片木太郎のアトリエに足を踏み入れる気になっていた。
主の太郎が逝ったままの部屋を残そうとした義姉の英子さんも没後十年の作品展の準備を香美市立美術館で思い通りに済ませると入院して　展示会場に最終チェックに訪れることもなく会期半ばで呼び寄せられるように「タータン（太郎）」の元へと旅立った。
そんな自分流《弟勇の前我記（まえがき）》が生まれると、意外と本の中に入り易くなった。
『遺した兄がいたなら
遺されたものの始末を
つけてやる
そんな律儀な弟が居ても
不思議はなかろう』
と居直りの精神、いごっそう魂も加わって本作りの編集に取り掛かることができた。
我が家の城だった撮影スタジオにやって来るのは、片木太郎が手放したくなかった渾身の、その時々を代表する油彩画はもちろんだがそればかりではなかった。
大物はジャイアントと称するイーゼルに始まる絵描きの機材一式、スケッチ類は学生時代から絶頂の教師時代、退職後のモノまで、すべてが整えて遺されていた。
渡欧の際の資料類と撮影済スライドの多い事。そのスケッチ類も大小二〇冊余。
さすがに蔵書だけは、自前の写真関係で我が家もアップアップ、受け入れる隙もない。運ぶに及んで目を引いたのは、スクラップした自らの言葉、練りに練った生原稿や印刷物の数々。折々に綴った思い出やアートに関する自論論評等々。
多才な兄を網羅したい編集作業を、すべてひとりで背負っての一年余、校正がこの正月から始まった。
『寝て待て』のタイトルも決まるとゆとりと欲が出た。去年掴んでいた「かるぽーと」に他数カ所での作品の展示場を模索。
『画家片木太郎五十年の世界　没後二十年展』に相応しい自分にとっても大イベント企画。
年代を追う五十作品は、折々の太郎残影を、思い起こしてくれるファンが居てくれることを願っての、構成企画だった。協力ギャラリーさんは太郎・勇応援の有り難き証。
晴れて出版の『寝て待て』は各展示会場に。
ＴＳＵＴＡＹＡ中万々店では『平成の天皇』と『牧野富太郎』の書籍の狭間一等地に鎮座する栄誉までいただいていた。
激動の昭和を精神的にも翻弄されながら生き抜いた兄と、一回りの年齢差を持って生まれた弟の薄い縁ながら、一本を編むことで濃く交わる兄弟になることが出来た。
限られた字数で書き切れませんが、ぼくら兄弟にとっての父母への感謝はもちろん、今なお太郎の画集を待ち望む多くの教え子や惜しみない激励で長きに亘りご援助下さった兄太郎の後ろ盾の皆さまに深謝しています。

お寿司の本顛末

松﨑　淳子

昨年10月1日発刊の「土佐寿司の本」は松﨑淳子著やけど、本人はそれまでに書いたり、しゃべったりしただけで、若い友人たちが、撮影・編集・資金集めに奔走してくれて、あんなにすてきな本にしてくれました。

で、その上昇気流のモトですが。ナント、東京の男性が、２０１６年12月４日(日)に、高知の日曜市に来て、６軒の店で「田舎寿司」を購入。それぞれを丁寧に撮影して、食べて、感想を書いて、「魚を使わない田舎寿司のうまさよ」のタイトルでＳＮＳに流していたのです。

で、２つ目の〝ナント〟は――そのＳＮＳを知らせて来たのが、ニューヨークにいる高知出身の女子学生。彼女はニューヨーク工科大の大学院をめざして渡米中、在ニューヨークの友人が「高知の事がＳＮＳで流れてるよ」と教えてくれて、開いたらナント「日曜市」。もっとビックリは大好きな田舎寿司！もう、ビックリ仰天して、在高知市永国寺町の母上に知らせて来る。母上もビックリ。私に知らせてくれたってわけ。

そのＳＮＳの解説もいい。「普通の海鮮寿司だとネタが目立ち過ぎて、シャリは脇役っぽいところがあるが、田舎ずしではネタとシャリが一体となって、うまさスパイラルを起こしている」「上品でやさしい味。まわりにいる高知出身者がみんな大酒飲みで、自由人ばかりなので、きっと高知の人は荒くれ者だろうという偏見を持っていた。だけど、田舎寿司はどれも優しい味。ゆずがきいて上品」「ゴマがちゃんとひと味加えている。ゴマ、いいぞ！」「シャリがうまい。ゆず酢がきいている」ｅｔｃ。

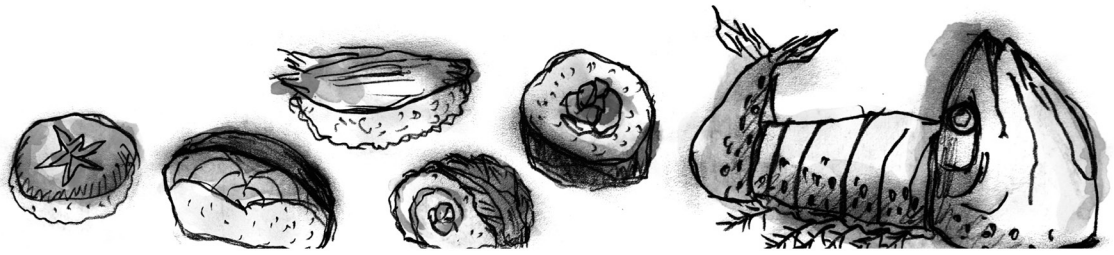
で、話は元に戻って。

２０１７年（土佐学協会創立10周年）の総会で「土佐の伝統食」の講演で「ニューヨークからＳＮＳの情報が」と話したところ、会場内は一斉にパソコンを開くし、成田十次郎会長からは「この話、ぜひ知事に」とのご提案。

後日、竹村昭彦理事長と役員、これに得月、すし柳、浜幸の社長で県に上申。県はすぐさま「土佐寿司を盛り上げる会」を立ち上げられて〝寿司を産業に〟と動き始められました。

さァ、これからが本番です。

昔から〝酢の好きな高知〟〝酢が効いちゅうはホメ言葉〟〝昔は米がご馳走やったき、なんでも寿司にした高知〟〝おきゃくはサーチ。サーチには多彩な寿司を盛らんといかん高知〟やったき、今も〝寿司が自慢の高知〟ですぞネ。ガンバレー。



記事を書かない記者がいます。

記事の価値判断をして、1面にするか、社会面などにするか収容面を決め、見出しの大きさや文言、レイアウトを考える編集者です。記事の価値は見出しの大きさに反映されます。

全ての記事が十数文字の見出しによって等間隔で並ぶネットと違って、紙面を開けば、何が重要なニュースか編集者の意向がダイレクトに伝わります。紙の新聞の良さの一つです。

5月から異動になり、地域面編集のデスク役をしています。地域面の場所は大阪本社内の編集局のフロアで以前と変わりませんが、今は系列会社化されています。他紙の元新聞記者や元編集者、元ホテルマン、元電話帳の編集者など、さまざまな経歴の編集者が日々の県版1～2個面を担当しています。

編集者は午後2時ごろに出社します。支局デスクからその日の出稿メニューが送られてきます。頭は記事が60行と写真2枚付き、人物紹介の箱、事件事故が3本……。見栄えの良い写真は大きく扱ったり、「動物園に野生のクマ」のような、人目を惹く話題ものは

ある日の四国4県の県版紙面

新聞余話 ⑩　大澤 重人

つかみ命の見出し

囲みの箱にしたり。支局と相談しながら、パソコン上に組み上げていきます。

五月雨式に原稿と写真が出稿され、編集者は記事を読み、見出しとレイアウトを考えます。見出しはある程度定型があり、短い文字数で、一見して内容がわかるものでなくてはなりません。編集者が組み上げた一つ一つの記事のゲラが私の所に来ます。見出しだけ見て、記事を読まなくても内容がおおづかみでわかるかどうかがポイントです。意味がわかりにくかったり、誤解を招いたりするような見出しは修正が必要です。記事を読んでみようと思わせるのも、見出しの力です。

愛媛の大学の先生が撮影したホタルの写真が、スイスのジャズギタリストのCDに採用されるという話題モノがありました。若い女性編集者が出してきた主見出しは「愛媛のホタル　CD表紙に」でした。ストレートすぎるかと思い、代替案として考えたのが「愛媛のホタル　スイスで光る」。もちろん「CD採用」は別に見出しに取ります。

別の日には、島根・石見空港内に養蜂場があり、蜂蜜が人気という原稿がトップ記事として。「甘さ『高級』空港はちみつ」という見出し案に対し、「ミツバチ飛ぶ石見空港」と代案を出しました。つかみの文言をどう考えるかが編集者の腕の見せどころです。言葉との格闘は午後9時頃まで続きます。

毎日新聞の場合、地域面の編集者名が紹介されています。編集者の個性で、記事の扱いに「熱」がこもることもあります。この見出しをどんな意図でつけたのか、想像して読むのも一興かもしれません。

私は編集者である一方で、空いた時間に取材をして記事を書き、二刀流と自称しています。

おおざわ・しげと
毎日新聞編集局兼毎日新聞ネット社（地域面編集）。現在は、主に外国籍住民との共生をテーマに取材。高知支局に支局長、次長として計5年半勤務した。著書に『泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡』（第26回高知出版学術賞特別賞受賞）など。

いろいろかいろ

その二十五

曇り日の夏

安藝眞一

梅雨入りが遅かった。それから雨が降る。幾日か降り、そして、降りみ降らずみ――。降ると見せて、雨が止まり、晴れるかと思うと小雨がかゝり、空も山も、正体の判らぬ天気が続く。梅雨明けまでは遠い先にある。夏はまだまだ先で、行きどころもない。

生れた時には、もう支那事変が始まっていたし、「戦時中」という言葉が朝夕に、一日中繰り返される日常だったから、気の晴れ間などなく毎日が曇りで晴れていても梅雨空の続く暮しだった。

戦時下というものは何を思いついても戦争と引きくらべられるので、見えない鉄の線が辺り一面に張りめぐらされたような窮屈が町のいたる所に拡がっている。それでも大人達は何とか忙しく立ちまわっているが、子供にとっては、行き止まりばかりの毎日で、喚声を上げて走りまわるという事は、ほとんどない日々であった。

町には流行歌の「愛染かつら」の曲が切れぎれに流れていたが、気がつくといつの間にやら軍歌にとって変り、どちらにしても子供に歌えるものでなく、近所の友達に出会っても賑やかな話にはならず、曇り空の行き別れとなる。

小学校に入ると、すぐ太平洋戦争がはじまった。真珠湾攻撃を新聞で知り、万才万才となった。誰に教えて貰ったわけぢゃないのにどうして万才！を知ったのだろうか。日本は勝つと思いつめて、その強い思いはシンガポール陥落まで続いたが、胸の沸き立つ思いでも空は曇り空だった。晴れた日もあっただろうに曇り日と思い出すのは、勝ち戦さが伝えられても、戦時中という事で空の上から蓋を押しつけられる気配が続いていたと云うこと。戦争が始まって間もなく、アメリカの大統領ルーズヴェルトが死去し、これは戦果と何も関係がないのに、万才！の扱いとなり、小学生の自分にも敵の大将が死んだら日本の勝ちと思い込んで万才を繰り返したりもした。それ以来、戦況が途絶えた。戦いは進んでいたし、新聞にも戦果の報道はあっただろうが、子供には伝わらない。ただ〳〵曇り日の毎日が続いていく。面白いことは何一つなかった。

空も心も曇っていても梅雨どきの楽しみは楊梅売りの声を聴く朝の事。もう楊梅売りが来る筈と胸ときめかして待つも、売り声なく登校の時となり無念を胸に学校へ。放課後を飛び出して家に走り帰り、楊梅売りの呼び声を待つ。やっと手に入れた赤紫色の果実に塩をまぶして誰よりも多くと口に投げ込む至福の時。楊梅はいつも梅雨の雨の匂いがした。

曇り空の夏がゆき、秋も過ぎて正月が明けても、大人達は言葉少なくなり、戦争が終り近くなった事が日毎に感じられた。南の島々での玉砕が続けて報じられ、胸騒ぎ高鳴る夏の夜、高知の街が空襲で灰となった。家も消えた。

疎開した先は嶺北の汗見川のほとりの家。空が抜けるように青く取り囲む山々が緑に輝いている。音立て、流れる清冽な川のしぶき、曇り日の町の想い出が吹っきれた様に消えて、谷を渡る朝夕の川風に力が湧き上る思いで立ちつくす。それでも続いていた戦争も玉音放送で終ると、村の小学校の運動場を取り囲む樹々が一斉に大声を上げて、空が青く高鳴っていく日々が続いた夏休み。

あれから七十四年も過ぎて、又夏が来る。行き場のない曇り日続きの戦争を八月十五日の風が吹き払った空の青さを思い出している。まぶしい陽の光、樹々のざわめきに合唱する清流のしぶき。あの空の青さに今年も会えるだろうかと目をつむる。

了

あき・しんいち／高知市

キルギスタンからコンニチハ ⑦⑤

日本語教育事情２「就活」

氏原名美

うじはら・なみ
越知町出身。北海道大学卒。キルギス国立ビシケク人文大学教授。「キルギスタン」はキルギス共和国の通称の一つ。

年度末試験が始まった。五月いっぱい各学年の学年末試験、六月末までは最終学年の卒業国家試験と研究論文審査だ。大学は滞納学費の回収率を心配し、教師は卒業生の進路が気になる季節だ。ところが六月に入ってもまだ誰も就職先が決まっていない。しかし学生たちは焦る風でもない。キルギスの就活は大学卒業後に始まるのだ。

＊＊＊

今年の日本語科四年生は言語学専攻課程の十二人。いつもの年の半数だ。三年進級時に教育科学省の指示で日本語科から二つの専攻課程が閉鎖され、かなりの数の学生が転学してしまったからだが、この十二人のうち日本留学中の二名と卒業論文を提出できなかった一名を除いた九名が学費の滞納もなく卒業資格を得ることができた。

九人は、国家試験をクリアして、六月末の卒業論文審査にも合格、あとは卒業証書が授与されるだけとなり、いよいよ就職活動をと思いきや、「暑いのでイシククリ湖に行って休んで、帰ってきてから考えます」と呑気に構えていて心配になるが、ある意味これで正解だ。

毎年夏は民族大移動の時期で、猛暑の首都から避暑地へ人口が大移動する。人事権を握る役所や企業のお偉方も例外ではない。長い有給休暇を取って首都を留守にするから、夏は就活に適さないのだ。いっそ避暑地で就職説明会でも開けばいいものを、役所は無論のこと企業もリクルートには無関心だ。「向こうが贈物持参で雇ってくれと行ってくるのに、なんでこちらから動く必要が？」というわけだ。

＊＊＊

キルギスは公務員試験も企業の就職試験もない。その代り、地縁血縁が物を言う。口利き一つで外務省にでも教育科学省にでも就職できるし、空きがあれば国立大学の専任講師にだって簡単に採用してもらえる。しかし、省庁でキャリアを目指すには一年から二年、ほぼ無給のインターンを覚悟しなければならないし、キルギスのアカデミーは大枚はたかなければ学位論文も受理されない世界だから、公務員は敬遠され、薄給の教職や研究職は見向きもされない。語学力を生かしたい学生は国際機関や外国資本の企業を目指して就活する。日本語なら、学生たちの就職希望はあわよくば大使館か国際協力機構（JICA）、それが無理ならJICAプロジェクト（JICAが政府開発援助として現地行政機関や日本企業に業務委託した事業）となる。

卒業試験が始まったあたりから学生たちにはJICAプロジェクトが契約スタッフを募集しているという話が伝わってくる。卒業生の何人かが面接に行ったらしい。まず、日本留学経験のある女子が内定をとった。別のプロジェクトでは建設現場を指揮する日本人のアシスタントとして男子が採用され、近々地方の山岳地帯に赴くことになっている。

＊＊＊

プロジェクトの実体である日本企業の多くは、必要人員は引き抜きか口コミで十分集まると考えているのか、大学に対して「優秀な卒業生を推薦して欲しい」とは言ってこない。そのくせ「人材がなかなか集まらない」と嘆いている。そして、専門用語だらけの文書の翻訳は経験を積んだ者でなければ埒が開かないとわかってから、ようやく頼み込んでくる。「経験も知識も豊富な日本語エキスパートが欲しい。新卒じゃなくて…」と。こうして学生の就活が一段落したころ、現役教師の就活が始まる。卵を産んで育ててくれる親鳥がいなくなった後のことは、誰も考えようとしない。

了

ビシケク人文大学日本語日本文学講座
https://japanesephilology-bhu.jimdo.com

おのころじま 大隠 流木記

ふんせんき

田島征彦

17. やんばるの少年（1）

山原と書いて「やんばる」と読む。沖縄本島北部の深い森は、やんばると呼ばれている。

やんばるには、イタジイやオキナワウラジロガシなどの亜熱帯性常緑広葉林が生い茂っている。琉球列島は大昔、大陸から切り離されて、まわりを海で囲まれているので、生き物たちは独自の進化をとげて、固有種や固有亜種が多く見られる。

防衛省沖縄防衛局は、その森の中に米軍機が訓練をするヘリパットを6つも作るため、建設予定地の生物分布調査をした。結果は、四千百五十八種もの生物が記録された。（二〇〇六年）そのうちに12種の植物と11種の動物がやんばるの固有種・固有亜種で、絶滅の恐れがある種は百八十種も含まれているし、国と県が指定する天然記念物が8種も記録されている。この結果から、ヘリパット建設事業が自然破壊につながることは予測されるのに、沖縄防衛局は環境保全措置で問題なしとしている。しかし、その根拠は説明されないまま、森の樹は何千本も切り倒され、赤土を剥出しにして、基地建設は強行されている。

やんばるの森を舞台に絵本創りを始めて、沖縄へ通っていることは、この連載にも書いたが、絵本の構想は動き出した。

やんばるの森でくらすAさん一家と親しくなったからだ。オスプレイが、森の木々や家の屋根すれすれに飛ぶ恐怖、子どもたちが眠られなくて、愛する森の家を捨てて行く人たち、そして、一緒に森に棲む生き物たちへの想いなど、たくさんの話をしてくれた。

ぼくはAさんの家のすぐ下の谷川で、子どもたちと一緒に、大きなウナギを捕えて、蒲焼きにしてもらい、ご馳走になったりした。

子どもたちは、谷川の淀みの淵へ、高い木の上から飛びこんでは、また、木の上へよじ登って遊ぶことにあきない。

ぼくが、丁度この少年たちと同じ年ごろ、高知の山の村で、全く同じ遊びをして、川魚や山鳥を捕って食べていた。50年も前のぼくらの世界が、まだ、ここでは生きている感動は、三年間の取材で、絵本が実を結びかけていた。

理不尽な国の力で、森から追われる子どもたちのことを、できるだけ、声を荒げず、優しさと悲しみの中に描いた。ところが、出版社から「片寄っている」から出版できないと通知が来た。

Aさん一家から「わたしたちの生活そのままが描かれているのに…」と悔しさをにじませた便りが届いたのは、去年の年の瀬が迫った頃だった。

たじま・ゆきひこ（染色家・絵本作家）
大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖縄県高江集落を通って「やんばるの少年」を制作。5月完成。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

出版物紹介

『昭和ギャル　三世代を生きて』

矢野　元子

B5判並製本　296頁

「昭和生まれのモッチャン」は、86歳になりました。前作が出てから3年余。自分史・後篇「昭和ギャル　三世代を生きて」が令和元年五月一日上梓されました。多才な元子さん。写真、新聞記事、手書き原稿、発表したもの、文章、短歌、詩、年賀、前作寄贈のお礼状・感想等。

・はじめに＝　57歳の新妻さん私は57歳で初めて結婚しました。後でわかったことは「矢野孝男を町長に立てよう」とするための政略（？）だったのです。とのべています。が見事に町長夫人として力を発揮します。

・二人三脚の日々＝夫・矢野孝男氏は、押され押されて春野町長を2期とも無投票で当選。町長在職中は一心同体、二人三脚の同士であったと。孝男氏からも感謝の言葉が寄せられています。二期八年で退任。

ひとすじに育てし
春野拓けゆくまほろばの丘
永遠に生きなん

の歌碑を建立します。

約10年二人っきりの同士の夫君孝男氏は死去します。

・また一人になりました＝何度か誘われていた短歌。夫の急死で、眠れぬ夜、心を落ち着かせるために書きとめだした。と、短歌のはじまりです。また、音楽・ソプラニスタの岡本知高さんの応援。コーラスグループの立ち上げ等々、よみきかせ、すこやか大学への参加。

・短歌

淡あわと朝の陽ざしに目覚むれば
激痛とたたかう一日始まる

（高新文芸一席）

編集者の好きな短歌

伏しいても耳も聞こえる目も見えるものも言おうぞ昭和ギャル

吾一人この世に残し逝きし友みやげ話を楽しみに待て

入院もあの世もすべておことわり
病気なおす術はないのか

見事な家系図は今回元子さんの結婚にはじまり、甥のお子様三人が結婚されました。そのお一人は77代目です。おめでたい生きた家系図になりました。

前回も今回も著者は入院中の出版となりました。

『春秋の記』

山﨑　俊明

A5判上製本　162頁

「まえがき」より抜粋

私がこれから書こうとしているのは、自分が八十七歳となる今日迄、「如何に生きてきたか、その証を記したものである」と考えている。言い換えれば「自分史」を書くことである。

（中略）

まずこれ迄、書き続けている日記を出してみること、次に国内外の旅行に際して業者から戴いた資料も残してある。紀行文や講演記録もとってある。これだけあれば後は何とかなるだろう。

印刷屋さんの「すったもんだ」

代表取締役　永野　正将

昨今「働き方改革」というキーワードを聞かない日はないほど世間を賑わせておりますが、多分に漏れず弊社でも取り組むべき課題です。

しかしながら、ありがたい事に世間を賑わす前から社員同士が自ら「働きやすい職場」「新入社員が来てくれやすい環境」を目標に試行錯誤を重ね、２年前には20時21時は当たり前だった環境も、最近では19時に残っている社員はほとんど居ない状況にまでなってきました。

一昨年の弊社のスローガン「良くなる考え、良くする行動」行動指針「常に「最善なのか」を考える・思いやりのある行動をとる」、そして昨年のスローガン「改善に挑戦」行動指針「仕事の改善に挑戦（やり方、仕組み、考え方）・自身の改善に挑戦（技術、能力、性格、意識、生活）・職場環境の改善に挑戦（コミュニケーション、５S）」と掲げ、それらを真摯に受け止め実直に進めてくれた社員全員の努力の賜物だと心から感謝しています。

現在は、有給休暇取得はもちろんのこと、年間の休日数をいかに増やせるかを試行錯誤している所です。今年の飛鳥のスローガンは「意識の改革」、改革とは改めて変える事。行動指針は割愛しますが、半期経過して着実に個々の意識は変わっていると実感しています。

来年2020年は先代の急逝から10年になります。この10年間、社員、お客様、関連業様、多くの経営者の先輩や仲間、友人、そして家族に支えられ必死に走ってきました。「天国の親父も少しは褒めてくれるかな」などと思いつつも、まだまだ45歳の若造、寅年しし座、猪突猛進でこれからも全力で走っていきますので、今後とも株式会社飛鳥をよろしくお願い申し上げます。

慰労会＆懇親会

7月26日金曜日、「四季料理くらり」にて慰労会＆懇親会がありました。桜の咲いていない花見から約四ヶ月ぶりの会社全体での飲み会で楽しみにしていました。

おいしいお料理とお酒を堪能しながら、普段はあまり深い話をした事のない社員と話ができたり、常務から飛鳥の起源から40年にわたる歴史、携わってきた先輩方の武勇伝や功績のお話を聞き、ただただ関心するばかりでした。お酒の席で聞いた話ですが、忘れてないですよ！きちんとおぼえてますよ。

今期の後半戦へ向けての奮起となる楽しい会になりました。今期の行動指針に私が最も意識しているのが「相手のためになるか意識する」とあります。私自身も飛鳥も意識しながら忘年会でまたうまい酒がのめるように成果を出します。

転職組の私から見て、当たり前のように助け合って仕事するチーム力が飛鳥はすごいです。みんな当たり前のようにしてるからすごいことに気がついてないかもしれないのですが…。

あっという間の2時間（飲み放題）、私を含め話し足りない飲み足りないメンバーは、二次会、三次会へと…。

（長谷部　記）

わが家の太郎 ㊻

余生

永野　雅子

太郎は7月7日で14歳になった。柴犬の寿命は15歳位と聞いていたので、まだまだ元気でいてくれると思っていたが、昨年両目を失明してからはすっかりおじいさんになって、散歩に連れ出しても途中からくるくる回って歩かなくなるし、方向がわからないから逆戻りして、結局早々に散歩は切り上げて帰ってくることになる。

それでも食欲はあって、週1回は大鍋におから料理を作っては冷凍している。

ところがそのおからが、スーパーに行ってもいつも売り切れ、仕方がないので「おからパウダー」を買おうと探すがこれもない。

お豆腐で代用してみたが、水分が出てベチャベチャで、太郎もあまり食べようとしない。

店員さんに聞くと、テレビで「おからダイエット」なるものが放映されて以来、何度発注しても「おからパウダー」が入荷しないと言う。生のおからは午前中に店頭に並ぶのでその時間にご来店くださいとのこと。

いつもの事ながら、メディアの宣伝効果は抜群。なんとか体重を減らしたい気持ちは私も同じ。

以前、孫たちとお風呂に入っていて、私のお腹を見て「おばあちゃん、赤ちゃんはいつ生まれる?」と聞かれたときはショックだった。

おからで簡単に体重が減るとは思えないけれど、ブームが下火になればその内に手に入るだろうと諦める。

※

食事の前に飲ませるのが薬。これは食欲が有ろうが無かろうが、お医者様から必ず飲ますように言われているので、太郎の好きな缶詰肉に混ぜ込んで手のひらに載せ、口元へ持っていく。ぺろぺろ舐めながら食べてくれると嬉しい。

見向きもしてくれない日は、あれこれ工夫するだけに終いには腹が立つ。こちらも意地になって薬を飲まないと食事はあげませんとばかり、兵糧攻め作戦。

ところが、夜中に「ウー!ワン、ワワン、ワン」「まだ聞こえんか、わからんか」、とばかり大きな声で吠え始める。その吠え方が、誰かさんが怒ったときの言いように似ていて思わず吹き出すときがある。

思えば太郎は決して愛玩犬ではない。孫たちにじゃれるとか、私に甘える仕草など一切しない。むしろ孤高の犬（?）の感じで、可愛げはないけれど、14年も一緒に暮らすとまさに家族、まして夫にとっては癒やしの存在だったのだろう。

夫が逝って9年、「お父さん、太郎の脱出防止のためにあなたが苦労して作った塀のネットも外しましたよ。太郎もすっかりおじいちゃん、脱出する元気もありません。彼の余生が安楽でありますように、見守ってね。」

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役